

り、わかりにくい記述であったりすると利用されない。

もっとも利用可能性が高いのは、確認行動などを意識的に行わなくても利用できる外的手掛かりであり、さらに、仮にエラー行動が生起しても、事故につながらない外的手掛かりである。対象そのものに制約がある場合がそうである。機器のしくみとして、インターロック、ロックイン、ロックアウトなど¹⁴⁾を設けるフルプルーフな設計¹⁵⁾にすれば、確認のための外的手掛かりとしてだけではなく、エラーが生じても事故は確実に防止できる。これは、外的手掛かりの利用可能性が極めて高いと考えることができる。

6 おわりに

エラー防止の動機づけモデルは、ヒューマンエラー防止のために何をなすべきかを考える上で提起されたモデルである。モデルとしては多少粗削りではあるが、心理実験によってその妥当性が検証された。その結果、動因と誘因の相互の関係によって外的手掛かりが利用されることが明らかにされた。実際にエラーを防止するには、外的手掛かりを設け、その利用可能性、つまり誘因を高めることがエラー防止には必要であることが示唆された。

今後、実験条件の設定を再検討するなど、さらに精緻化したモデルによって、本モデルがヒューマンエラー防止に役立つことが期待される。

謝辞

本研究における実験は、北九州市立大学文学部人間関係学科の柳田せつ子さん（2000年度）と大下真紀さん（2001年度）の卒業論文の一環として行なわれ、実験を実施したお二人に、お礼を申し上げます。

引用文献

- 1) Tversky, A., & Kahneman, D. 1974 Judgment under uncertainty. *Heuristics and biases*, **185**, 1124-1131.
- 2) 芳賀 繁 2000 失敗のメカニズム—忘れ物から巨大多事故まで 日本出版サービス Pp.32-35.
- 3) Suchman, L.A. 1987 *Plan and Situated Actions* Cambridge University. (佐伯 胖監訳 1999 プランと状況的行為 産業図書)
- 4) Hull, C.L. 1952 *A Behavior System ; An Introduction to Behavior Theory*. Yale University Press. (能見義博・岡本栄一訳代表 1971 行動の体系 誠信書房)
- 5) Spence, K.W. 1956 *Behavior Theory and Conditioning*. Yale University Press. (三谷恵一訳 1982 行動理論と条件づけ ナカニシヤ出版)
- 6) Atkinson, J.W. 1957 Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- 7) Atkinson, J.W., & Litwin, G.H. 1960 Achievement motive and test anxiety conceived as motive to approach

- success and motive to avoid failure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **60**, 52-63.
- 8) 山内桂子・山内隆久 2000 医療事故 なぜ起こるか、どうすれば防げるのか 朝日新聞社
 - 9) Rasmussen, J. 1986 *Information processing and human-machine interaction ; An approach to cognitive engineering*. New York:Elsevier Science Publishing. (海保博之・加藤 隆・赤井真喜・田辺文也 訳 1990 インタフェースの認知工学：人と機械の知的かかわりの科学 啓学出版)
 - 10) Sasou,K. & Reason,J. 1999 Team errors: definition and taxonomy. *Reliability Engineering and System Safety*, **65**, 1-9.
 - 11) 山岸俊男 1998 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会 Pp.144-148.
 - 12) Zechmeister,E.B.,& Johnson,J.E. 1992 *Critical thinking ; A functional approach*. Brooks Cole. (宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池 聡訳 1996 クリティカルシンキング入門篇・実践篇 北大路書房)
 - 13) 清水秀行・鈴木 哲・矢頭攸介・土屋文人 2002 オーダリングシステム導入の注射薬調剤エラーに及ぼす影響 日本人間工学会第43回大会論文集 Pp. 428 -429.
 - 14) Norman, D.A. 1988 *The Psychology of Everyday Things*. Basic Books. (野島久雄訳 1990 誰のためのデザイン?—認知科学者のデザイン原論 新曜社)
 - 15) 松尾太加志 1999 コミュニケーションの心理学 認知心理学・社会心理学・認知工学からのアプローチ ナカニシヤ出版

Ⅲ. 健康危険情報

とくに健康に危険を及ぼすようなことはなかった。

IV. 研究成果の刊行に関する一覧表

1. 論文

発表者氏名	年月	題 目	雑誌名 もしくは学会名	本報告書 への掲載
森永今日子・山内桂子・ 松尾太加志	2003	医療事故防止におけるチームエラーの回復に関する研究 (1) ～エラーの指摘を抑制する要因についての質問紙調査による検討～	北九州市立大学文学部紀要 (人間関係学科), 第 10 巻, 55-62.	○
山内桂子・森永今日子・ 松尾太加志	2003	医療事故防止におけるチームエラーの回復に関する研究 (2) ～看護職の事故防止研修におけるアサーション研修の試み～	北九州市立大学文学部紀要 (人間関係学科), 第 10 巻, 63-70.	○
山内桂子	2003	医療におけるヒューマンエラーの実相	ヒューマンインタフェース学会誌, 第 5 巻, 33-36.	○
松尾太加志	2003	外的手掛かりによるヒューマンエラー防止のための動機づけモデル	ヒューマンインタフェース学会誌, 第 5 巻, 75-84.	○
大坪庸介・島田康弘・ 森永今日子・三沢 良	審査中	医療機関における地位格差とコミュニケーションの問題: 質問紙調査による検討	実験社会心理学研究	

2. 学会報告・講演

発表者氏名	年月	題 目	雑誌名 もしくは学会名	本報告書 への掲載
明日 徹・松尾太加志	2002.10	理学療法場面における情報伝達障害要因の実態調査	九州心理学会第 63 回大会ポスター発表	○
河野龍太郎	2002.12	元航空管制官の見た日本の健康医療リスクマネージメントーヒューマンファクターー工学から見た日本の医療システムー	ライフスタイルケアネットワーク第 2 回公開フォーラム	○
垣本由紀子	2003.1	インシデントレポートの問題点を探るー航空と医療の現場からー	日本人間工学会 航空人間工学部会第 81 回例会	
河野龍太郎	2003.2	ヒューマンエラー発生メカニズムと防止対策の考え方ーエラー防止対策発想手順の試みー	リスクマネージャー養成のためのワークショップ	○
大坪庸介	2003.3	医療チームにおける非共有情報の共有化	日本グループ・ダイナミックス学会第 50 回大会口頭発表	○
篠原一彦	2003.3	先端治療の現場から工学への要望	2003 年度精密工学会春季大会学術講演会シンポジウム	○

発表者氏名	年月	題 目	雑誌名 もしくは学会名	本報告書 への掲載
嶋森好子	2003.5	チーム医療における事故発生とその予防	日本学術会議公開シンポジウム	
嶋森好子・福留はるみ・村上美好・平田京子・由井尚美・増子ひさ江・大島敏子・李代 馨	2003.8	コミュニケーションエラーの発生要因に関する研究—医療従事者間のコミュニケーションエラーの防止対策の検討—	第7回日本看護管理学会年次大会	○
松尾太加志・山内桂子・垣本由紀子・芳賀 繁・大坪庸介・森永今日子・三沢 良	2003.9	医療事故防止に心理学はどのように貢献できるか (4) 医療現場研究からの提言	日本心理学会第 66 回大会ワークショップ	
森永今日子・三沢 良	2003.9	医療現場におけるエラー指摘を抑制する要因 I —看護師を対象として—	日本心理学会第 66 回大会ポスター発表	
三沢 良・森永今日子	2003.9	医療現場におけるエラー指摘を抑制する要因 II —医師・薬剤師を対象として—	日本心理学会第 66 回大会ポスター発表	
森永今日子・藤村まこと・三沢 良・山内桂子・松尾太加志	2003.9	事故を捉える視点とエラー指摘への抵抗感	日本社会心理学会第 44 回大会口頭発表	

20021325

以降は雑誌/図書等に掲載された論文となりますので
P203-P204「研究成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください